通信第七十三号　一人なりとも信をとるべきならば、身を捨てよ

報恩講が終わり一カ月過ぎました。まだ余韻があります。岐阜県の田中秀法さんの「新、つぶやき」には次のような感想が述べられています。

改めて気づかせて頂いたのですが、～～～今回のご法話を拝聴させて頂いて、大いに知らせて頂きました。それは「本願を信じ、念仏申さば仏になる」というところでした。～～～私は三十才の時、よき人にお遇い出来まして、その後しばらくしまして、自分でも止めることが出来ないほどお念仏がでました。そのことがあってから、仏法を真剣に聞かせて頂こうという心が湧いてきました。あれから五十年余年、欠かすことなく今日まで聞法を続けて参りました。～～～

　　歎異抄は五十年も前に藤谷先生がお亡くなりになるまで、毎月聞かせて頂いて言葉は知っておりました。ふりかえって気づかせて頂きますと、歎異抄第十二章「本願を信じ、念仏申さば仏になる」というところですが、本願が届かず「念仏申さば仏になる」というところで、毎朝、晩、真面目にお念仏申してきたのでした。「念仏申さば仏になる」を後生大事に

続けて来たのでした。それでは「仏作って魂入れず」になっていたのでした。浄土真宗は「易行難信」と言われて来ました。如来より賜ったのは事実であったのですが、気が付くと「私が申す念仏」に成っていたのでした。

二十願の自力の念仏と十八願の他力の本願念仏との薄紙一枚の境目の所です。ここは親鸞さまが注意深く教えて下さっています。

悲しきかな、の～～に（痛みなげくこと）すべし。深くすべし。～本願のをもってが善根とするがゆえに、信を生ずることあたわず、仏智をらず。かの（浄土）因を建立せることを了知することあたわざるがゆえに、報土に入ることなきなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典三百五十六頁

　こういうところが「を聞け」というところであります。この後に三願転入の教えが説かれています。多くの同行さん方がぶつかる課題でもありましょう。

二月十六日、愛知県刈谷市の本願道場でお遇いした時、だれかが「田中さんは十才ぐらい若返えりましたね」と申されましたが、その通りでした。八十三才になっても脱皮していかれる本願他力の道は有難いなと思わされました。

新潟県からお参りの渡辺義彦さんは皆さんがお帰えりになったあと一人でお泊りになりました。法要中も深夜まで座談があり、ふらふらの中で私の心のうちに聞こえていたのが次の蓮如上人のお教えでした。

　　「まことに、一人なりとも信をとるべきならば、身を捨てよ。それは、すたらぬ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮如上人御一代記聞書　１１５条その日の深夜、渡辺さんが「落日」という歌を歌われました。

　　うらぶれこの身に吹く風悲し

　金もなくした恋もなくした

　　明日の行き方がわからないから

　　死のうと思ったまでよ

　　生まれた時からこの世のつらさ

　　知っているようで何も知らずに

　　落ちてはじめて痛さを知って

　　恋にすがってまた傷ついた

　　それでもこの身をつつんでくれる

　　赤い夕日に胸をあたため

　　どうせ死ぬなら死ぬ気で生きて

　　生きてみせると自分にいった

渡辺さんの深い無意識のいのちのうめき声のように、私には聞こえました。次の日の朝、顔をあわすなり渡辺さんは「南無阿弥陀仏でした」と、私もとっさに「そうです」と応答させられました。渡辺さんが休まれた部屋はかつて大石先生がおやすみの部屋でした。床の間のすみに先生の「お念仏は生きておられる」というの額が置かれていました。四日目ではじめて目に留まったそうです。

渡辺さんがさらに一日泊って頂いたことで大事なことを教えて頂きました。蓮如上人の（信心について話し合い）せよ。との仰せです。

　四、五人の衆、寄り合い談合せよ。必ず、五人は五人ながら、（自分の都合のいいように聴く）に聞くものなり。談合すべき

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮如上人御一代記聞書　一二〇条　近年になって同朋大会などで人工的に人が集まりにぎわっているようでしたけれども、信心

の事がいつの間にか語られなくなり、聞かれなくなりました。したがって信心について話し合

うという事も無くなりました。念仏者は生まれなくなる必然があったのです。

少人数でじっくり信心について語り合う場が欠けていたのです。多くの人が組織の枠の中にいますから、疑問はあっても行動をとることは大変な勇気のいることです。「どうやって多くの人が寺に集まるか、寺が活性化し廃寺とならないか」という議論や取り組みをするようにはなりました。

　しかし、そんなことでは通用しなくなりつつあります。寺に跡継がいない、生活できない、寺の維持が出来ないという事で寺族や門徒さんが寺から離れています。私の周りでも珍しくなくなりました。寺を守るだけなら、自我を守ることになるから願力はでません。如来さまの加威力は生じないのです。

　親鸞さまの滅後一五三年を経て蓮如上人が生まれたころ、本願寺はさびさびとして参詣者は少なく、信心の灯はまさに消えかけていたのです。このことが実感されつつある今日この頃です。

　　一宗のと申すは、人の多くあつまり、威の大なる事にてはなく候う。一人なりとも、人の信を取るが、一宗の繁昌に候う

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮如上人御一代記聞書　一二二条

この仰せは建前やきれいごとではないのです。

　四月で四年になるユーチューブ江本常照は四三五本があげられています。何千、何万という数

の人が視聴してくださるのではありませんが平均百人位のご同行さん方が視聴して下さってい

ます。第一回が二〇二〇年四月二十三日の「小さな灯り」です。インドのジャータカ物語にある

貧者の一灯という物語です。

ある村で夜、をともして釈尊を迎える行事がありました。貧しい家では提灯を買えるお金がありません。その家の少女は髪の毛を売って一本のローソクを買いました。夜、それぞれの家に提灯のりがともされました。ところが、その夜はなぜか大風が吹き荒れました。するとことごとくの家の灯りは消えてしまいました。しかし、不思議にも貧しい家のローソクは消えませんでした。釈尊はその貧しい家にお入りになりました。

この物語には、身を捨てる「捨身の半偈」のお心や「信心の智慧（光明）」というおはたらきが象徴されています。そして、真実の信心を頂く姿勢が願われています。

　親鸞様八十五歳の時、

　　田舎の人々の、の心も知らず、あさましき愚痴きわまりなきゆえに、やすく心得させんとて、同じことを、たびたびとりかえしとりかえし、書きつけたり、こころあらん人は、おかしく思うべし、あざけりをなすべし。しかれども、おおかたのそしりをかえりみず、一筋に、愚かなるものを、心得やすからんとてしるせるなり

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　唯信鈔文意

親鸞さまの「真実信心を受けてくれよ」との捨て身の願いが響いてきます。その願いを受けられてお書き下さった蓮如上人のさまは五百年のに無数の念仏者を生みだして来ました。

知識教養でなく生活や生き方を通して信心を頂くことは大変なことであります。誤解されたり、があることを覚悟しないと進めないことは歴史を見ればあきらかです。先人たちの捨て身のご苦労のお陰であります。さらにそこには法蔵菩薩さまのご苦労がはたらかれていたお陰で本願の教えが伝えられて来たのであります。改めて藤解照海先生のご制作「歓喜の歌」・「無碍の一道」の歌詞が味わえて来ます。

　　　　　　歓喜の歌

　　　一、ここは捨て身の新世界

を最後とし

六つの光にてらされて

二、最上無上の大利益

弥陀と我とがとけようて

喜び敬い拝みつつ

三、明るき心で見わたせば

見るもの聞くものことごとく

実相真如のの声

無碍の一道

　　　たとえとやかく　言われたとても

　　　おれはこの道　がけ

親鸞さまの　みあとを慕い

なんの後悔　あらばこそ

三月二十日、二十一日の長仁寺彼岸法要では医師の春彦先生と住職と私とでシンポジウム（決めたテーマについて何人かが意見を述べ、参加者と質疑応答を行う）を行う事と成りました。

　二十六日から二十八日にかけて東京から楫山百合子さん、愛媛県宇和島市の松田敏美さん達三、四人の同行さん方が泊まり込みで長仁寺に聴聞に来られます。

七月上旬にはアメリカのロサンゼルスで原田マービンさんとお遇いし、ご法座のご縁をいただく予定です。マービンさんは若い頃京都の龍谷大学に留学されていました。そこでわたしとのご縁がありました。彼のお陰で色々な外国のかたと会うことができました。現在、マービンさんは本願寺派の開教総長をなされているとのことです。ニューヨークの名倉幹さんと話している時に共通の知り合いという事がわかりました。連絡するとすぐにお互いに遇いたいということになりました。何か春の芽が一斉に萌え出るように身辺が変わってきました。

　次に冊子のご縁のお便りを紹介させて頂きます

　　　　この度は『リモート法座（一）』をご送付くださり有難うございます。

　　　今の自分が聞きたかったことがたくさん書かれており、感激しております。最近熱心なご門徒さんから「真宗の教えが門徒の方々に伝わっていない」とお叱りをうけています。その方は「住職の教えかたがわるい」「わかりにくい」「もっと積極的に伝道せよ」と責められます。宣伝ビラをまくようなことをしては誹謗のもととなるでしょうし、求めてもいない方に無理矢理に教えを聞かせても、余計に仏法から離れてしまわれるように思いますので、押しつけるような伝道はしていません。もっとも、自分でも教化が不十分な状態であることは感じていますので、いろいろ工夫して少しでも法に触れて頂くご縁をつくることができればと取り組んでまいりました。

　　　　このたびは冒頭から「自分はいつでも救われる立場、育ててもらう立場」「教えを聞いていない人を自分の下に見てはいけない」「ひとりでも下にいると思うと助からない」、大石先生の「私は行き倒れの方にいます」！

　　　　このようなまったく逆の目線をお示しいただき、驚きでした。が高ければ法水は止まってしまうのですね。ある法友はいつも、どんな人にでも「あなたのお気持ちをお聞かせください」という態度を崩していませんでした。その意味が今になって共感できます。～～～あくまで「わたし」が出たら本願の邪魔をするだけ。「わたし」が出たところで本願の力で吹き飛ばされるのでしょうが、ただただ聞かせて頂くところに本願の海水が流れてくるのでしょう。

　　　　海外の方々の質問はストレートで大好きです。わたしたち日本人は、どうしても直球勝負をさけて変化球を使いますが、仏道は直球勝負でいかなければ間に合わないかもしれません。

令和六年一月

　　　　　　　　　　　　　　　大阪泉北郡　本願寺派　願行山　萬福寺住職　良樹

亘さんは仏法のためにを建てられ今年の一月二十日に入仏法要をされたばかりです。暖かくなり、富山県高岡市の地震の復興がなされたら、富山へ行く途中で大阪に降り、佛母庵をお借りして本願道場のご縁をいただこうと思っています。

最後に富山県の浄円寺住職、さんが去年の十一月八日、はじめて私が浄円寺さんをお訪ねした時の印象をコラムに書いて下さっています。また、地震の時の有り様なども書かれていますので、浄円寺コラムを付録として同封させていただきました。

令和六年三月

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝